
学校での天才

コナンおたく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校での天才

【Nコード】

N5158R

【作者名】

コナンおたく

【あらすじ】

コナンと灰原は天才だ…小林先生は思った。テストではいつも百点、6年生の漢字の書きテストを出しても。進級できる帝丹学校で、コナンと灰原は学年を飛ばしていった!!!!!!

（前書き）

こんにちは！

はじめての投稿です！

この話、アニメでもにたようなのがあればいいなーっとかいつも思っています。

コナンと灰原の小学校生活、そういうのが一番好きです！

なんか、コナンと灰原が天才みたいで…（まあそうなんだけど）

~~~~~帝丹小学校~~~~~

## 1年B組

小林先生「今日はテストがあります！漢字テストと100マス計算テストです！」

生徒「えええええー！ー！ー！聞いてないし、なんでそんなむずかしそうなのあるの！ー！ー！」

先生「静かに！これはあなたたちの何を知っているか、なにを知らないかを先生たちが見るテストです！結構難しい問題もあるけど、わからなくて普通です。6年生までの全部の問題があるので、半分できてもすごくよい点です。このテストは、どのクラスにあなたたちが入るのかをきめるものです。もし全部できたら、あなたは中学レベルです！けど、みんな1年生レベルで当然ですからね。」

コナン（ふん、こんな簡単なテスト満点とってふつつだぜ。まあ、いままでのまじ1年生レベルのテストよりはましだけだな。）

先生「はい、では漢字テストをくばりまーす！半分以上習ってない漢字だから、むりしないでくださいね！」

コナン（なんだこれ、超簡単じゃねえかよ！おいおい、最近の6年生はこんな簡単なのならってんのかあ？！）

すらすら、とコナンはぜんぶ完璧に書いた。もちろん灰原も。

10分経過。100問ほどあったが、簡単だったためコナンと灰原はもう終わっていた。ほかの子でもう終わっているように見える子もいたが、ほとんど白紙だった。もう無理だ、とあきらめていたのだ。無理もない。「あいいうえお」を最近やつと終わらせたような1年生たちに、1〜6年生の漢字が全部できるわけは絶対じゃない。まあ、コナンと灰原を除くが。

30分経過。

先生「はい！もう終わりです！列の一番後ろの人、あつめてください！」

皆「はあー、ほとんどできなかったけど終わった」つか「ぜんぜんわかんなかったよ！」とかいっていて、ざわざわしていた。

歩美「ねえ光彦君どのくらいできた？」

光彦「ぼく、ぜんぜんできませんでしたよ。半分位は終わらせましたけど。」

元太「すげー光彦！おれなんて1個もできなかったぜ。」

光彦「実はぼく、姉に漢字教えてもらってるんです。だから、3年生までの漢字はできるんですよ。」

歩美「すごいね！私、2個しかわからなかった。ねえコナン君と灰原さん、どうだった？」

読みふけていた推理小説をコナンはおろした。

コナン「ん？ ああ、結構簡単じゃねえか？全部一応できたけど。あんな簡単なのいまの小学生習ってるんだな〜ておどろいたよ。」

コナンは口がすべった。が、たったいま小説のなかから現実引き戻されたのできずいていない。

灰原「私も全部できたわ。まあまあって感じね。わたし、漢字はにがてだから。」

歩美「すっすっすごい！！！！全部できたってことは、中学レベル！？もう2人とも天才だよ！」

元太「おいコナン、どういう意味だ？その『あんな簡単なの』てのは？！」

コナン（うつ、口が滑った！やべーやべー）「だ、だから、新一にいちやんが前なんかそんなこといつてたなあ、ておもったんだよ！」

光彦「へえ、そうなんですか…では灰原さん、漢字にがてなのに全部できたというのはどういう意味ですか？」

灰原（やつやば、わたしも口が滑った）だっ、だからね、お姉ちゃんにがてだけど私はすごいできるっていったの！」

探偵団「ふーん…」

あまり納得していなかった。

~~~~~三時間目~~~~~

先生「ハイ、つぎは100ます計算です！足し算ですから、簡単ですよ！先生が時間計りますから、終わったら手をあげてください。よい、はじめ！」

かきかきかきかき……………

コナン・灰原「はい！」（手を上げる）

先生「39・73秒」

先生（この子達すごく早い！普通早くても1分はかかるのに…まちがってそうにないし……あの漢字テストでも100点だったし…あの子達実は高校生だったりして…）

当たっている（笑）

光彦が数秒あとにてをあげた。

先生「1分05・44秒！」

そして皆の手があがってきた。

そして終わったころにはまた皆がやがやしていた。

みんな「コナン君と灰原さん早すぎ！どうしてそんなはやくできるの〜！？」

灰原「当たり前じゃない…私たちは大人なんだもの…」

クスツ、と灰原は小さな笑みを顔に浮かべた。

コナン（おいおい《苦笑い》）

みんなががやがやしてるうちに先生が『ちょっときて』という合図をコナンと灰原にだした。2人は先生のところに行った。

せんせい「二人とも、全部100点なの。漢字は6年生の漢字まで完璧に書いてるし、100マス計算は大人のスピードほど速いわ。両方とも塾に行っていないのは知ってるわ。けど、そうならどこでこんな学習を学んだの？私とても知りたいの。」

コナン「先生。ぼくたちは転校してきたっていうのをしってますよね。実は、僕たち前の学校ではもっと難しい事を習っていました。」

だからって今進級したいとは思いません。いまの生活で十分です。一年生としてこのままでいたいのです。」

コナンは適当に話を作り上げた。

先生「けど江戸川君、あなたたちの学習レベルははるかに1年生、いや、中学生をこえているわ。わたしたちのいまでできることはあなたたちにぴったりのクラスを選ぶ事なの。ほかの学校とちがって、帝丹小学校は進級ができるし… このままではもったいないのよ。進級クラスに入りなさい、二人とも。先生の命令です。」

どうしようもできなかった2人は、仕方なく進級クラスに入る事になった。一応、高校1年の授業をとるようにいわれたが、高校生に混じってでも学年トップだった。高2でクラストップのコナンと研究者レベル以上の灰原にとってはコレでも簡単すぎた。なので、高3のクラスに入れられた。このクラスはコナンにとってぴったりだった。ただ、まだ蘭が高2になのに自分だけ子供の姿で蘭より上にいくのはいかがと思った。そう、この進級のことはもちろん家族に知られるのである。なので、一応コナンは高3のクラスの標準テストでわざと50点を取りひとつ学年を下げてもらった。そうしたらどうだろう。なんと蘭と同じのクラスになったのだ！そう、むかし工藤新一としてかよっていたクラスに。コナンはひそかに喜んでいった。だが、いきなり灰原が隣から、

「まったく。その表情からみてあなた蘭さんといっしょのクラスになれてうれしいって思ってるのね。けどきをつけなさいよ。小学1年生のくせに高2の授業をとっているあなたはとも変わった子として知られる事になるのよ。そうしたら、組織があやしく思い始めるのも時間の問題… 『天才小1現れる』っていうニュースを聞いてね。まあ、用心深くすることね。蘭さんとても怪しく思うだろうし。」

とつめたい言葉をかけてきた。灰原は「100点とらないと満足しない派なのよ。」といい大学医院で勉強することになっていたのでコナンは

コナン（大学医院にいるほうが、もっと不審だつつうの。）

と思った。

そんなこんなで、コナンと灰原は帝丹高校・大学にはいることになったのだ。

（後書き）

何かよいアドバイスください！

多分何かミスをしているところがあると思いますが、スルーしてください。（すみません）

素人なので、なにもわかりません…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5158r/>

学校での天才

2011年10月8日21時04分発行